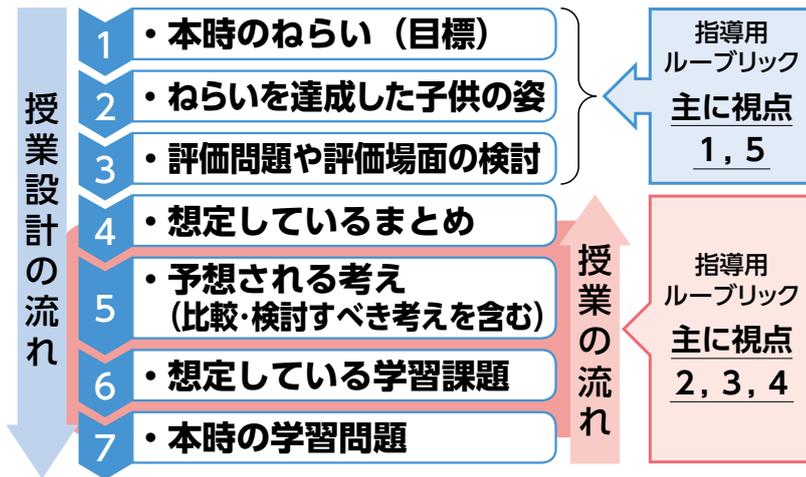


ポイント② 逆向きの授業設計により、授業改善を実現



○指導用ルーブリックの視点1 & 5に基づき、まずは**本時のねらい(目標)**、**ねらいを達成した子供の姿**を明確にする。次に「想定しているまとめ」へつながるように、子供に気付かせたい・発見させたいことは、**子供から**引き出すことを大切にする。つまり、「本時のねらい(目標)」→…「想定しているまとめ」→…と左図のように考え、最後に、**取り組ませるべき学習問題**を設定する。このように、子供たちを伸ばしている教師の授業は**逆向き**に授業設計されている。

ポイント③ 潜在的な教育効果 (ヒドゥンカリキュラム) に意識を向ける

○潜在的な教育効果を意識する

- 教師の直接的な指導のみが子供に影響を与えるわけではない。**無意識にマイナスの教育効果**を与えることがあることにも留意する。

例：児童生徒によって対応を変えること。(下記の様な場合において)

指名する際に、生徒Aは「Aさん」、生徒Bはあだ名で呼んでいると、教師と2人の生徒の親しさの**違いを感じさせること**につながる。**このような教師の態度**は、生徒Bを特別視したり、人によって対応を変えてもよいと捉えたりすることにつながり、「**マイナスの教育**」となることもある。

※その他、下記のケースなど様々考えられる。

- 子供が教師の方を向かないうちに話を始める。→ 話を聞くときは、先生をみなくてもよい。
- 教師が一度決めた約束を変えてばかりいる。→ 約束は守らなくてもよい。

その他

○ユニバーサルデザインの視点での授業改善

- 子供が学習活動の見通しをもてるよう、具体的に指示する。

例：子供への指示は多くても2つまでとする。

「ちょっと…」「いっぱい…」などの曖昧な指示でなく、できる限り数値を用いたり、時間を用いたりするなど、**具体的なイメージ**がもてるような発問・指示とする。

3 主に学級経営における留意点

ポイント 一人一人を尊重した学級経営

- 学級として**個性を受け入れられるような雰囲気**、**いじめを許さない雰囲気**をつくる。
4月の学級開き、学期始め、学校行事の際などの節目や、子供同士の関わり合いが多くなる際に、自分とは異なった考えをもつ友達がいて「当たり前」ということを理解できるようにしていく。
- 人の**悪口を言うことを許さない雰囲気**をつくる。悪口を言ってトラブルになったときは、できるだけ早く指導する。(可能な限りその日のうちに。特に土日を空けずに話を聞き指導する。)
- 友達のよいところに気付いたり、互いに助け合ったりねぎらったりしている姿が見られたときには、**全体の前**で称賛し、**友達のよい所**を見付けたり伝えたりできる学級をつくる。

その他

○教師が学年全体で子供を育てるという意識をもつ。

特に、気になる児童生徒については、担任一人で対応することがないよう、学年間や管理職への**報告・連絡・相談 (ホウレンソウ)**を徹底し**チームでの対応**を徹底する。